

テーマ

経済学の最初の講義は ナポリ大学から始まった

適用
分野

経済学史、社会思想史、社会
経済史、南イタリア近代史



研究
名称

18世紀ナポリ王国における経済学の形成
—アントニオ・ジェノヴェージ『商業講義』—

氏名
所属

奥田 敬 教授
経済学部 経済学科

内容

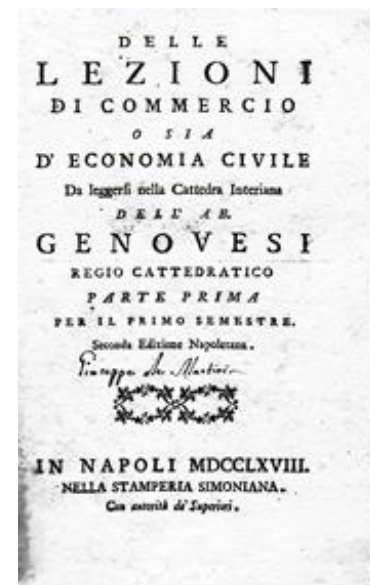
●特徴

経済学教科書の嚆矢と目されるアントニオ・ジェノヴェージの『商業すなわち市民の経済の講義』(1765-67)の特質と全体像に迫る。

●研究内容

経済学は近代ヨーロッパとともに登場した新参の学問である。一般にその始祖とされるアダム・スミスの『国富論』は1776年の出版であるが、実はその凡そ20年前、スミスの故郷北方のスコットランドとは対極に位置する南イタリアのナポリ大学には「商業と機械学」の講座が1754年に創設され、神学者から転身したアントニオ・ジェノヴェージ（1713-1769）によって、由緒を誇ったイタリアの大学では驚天動地の、学術的公用語のラテン語ならぬイタリア語での講義が始まっていた。当時の経済的先進国であった英仏蘭ではなく、後塵を拝した国でこそ、このような教育制度的な取り組みが試みられたことは、注目に値する。その背景には、ルネサンスあるいはギリシア・ローマ以来の昔日の文化的栄光とは裏腹の、法外な奢侈に耽る一握りの富裕層と、蔓延

する貧困に喘ぐ大多数者との懸隔という過酷な現実があり、それに対して〈知識の光明による人間の条件の改善〉という「啓蒙」の理想を集約的に表現したのが、この「商業と機械学」という講座名であった。「商業」とは、軍事的な「征服の精神」に取って代わるべき、新たな時代精神の標語であり、「機械学」とは、伝統的な「自由学芸」から貶まれてきた、農学を初めとする職人的な技芸全般を指す。そして有用な知識の最たるものとしての「商業」を「市民の経済(Economia Civile)」と敷衍したあたりに(右図のタイトルページを参照)、〈文明社会(Società Civile)における市民生活(Vita Civile)をめぐる新しい学問〉としての経済学の初志が籠められているのではなかろうか。



キーワード

経済学、啓蒙、イタリア、ナポリ、文明社会、市民生活

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 ■ コメント ■ 共同研究